

# 動詞のアスペクト分類の指導方法について

林錦川

## 一、はじめに

初心者に対して動詞の各活用形の用法と接続について指導する時、一番注意すべき点は次の二つにあると思う。

(一)すべての動詞は言語表現において、各活用形の用法と接続が一致しているとは限らない。例えば、「ある」、「いる」などの動詞は「あっている」、「いっている」という言い方はないが、「行く」、「来る」などの動詞は「行っている」、「来ている」という言い方がある。

(二)すべての動詞は一つの文法の形によって表わしたことがらの意味が同じであるとは限らない。例えば、「ある」、「いる」は第三変化形(終止形)で次のようなことを表わすことができる(註一)。

1 現在のことがらを表わす。

例：ねこがここにいる。

いま隣りの部屋に椅子がある。

2 未来のことがらを表わす。

例：ぼくは明日も家にいる。

自転車の一台中ぐらいなら、明日もたぶん学校にあるだろう。

3 恒常の事実・現在の習慣を表わす。

例：いつも夕方にはここにいる。

山田さんのお弁当には毎日必ずたまごやきがある。

しかし、「帰る」、「書く」などの動詞の第三変化形(終止形)は1の「現在のことがらを表わす。」というはたらきがなく、2・3のはたらきしか持っていないのである。

1 無。

2 未来のことがらを表わす。

例：今日は五時に帰る。

ぼくもすぐに日記を書く。

3 恒常の事実・現在の習慣を表わす。

例：私は毎日五時に家へ帰る。

私は毎晩日記を書く。

これらの「ある」、「いる」、「帰る」、「書く」などの動詞はごく普通の単語で、日常生活でよく使う機会があるし、基礎の段階に使われている教材の中にもその例文がよく見られるので、初学者に対して文法を指導する時、どんな種類の動詞にどんな文法の形があるかないかということや、どんな種類の動詞がある文法の形によって表わされたことがらの意味において、他の種類の動詞と違うところがあるかということなど、すなわち金田一春彦氏が提出した「国語動詞の一分類」というような内容のものを学生に了解しなければいけないのである。

## 二 金田一春彦氏の「国語動詞の一分類」の内容

金田一春彦氏の「国語動詞の一分類」は次のように日本語の動詞を四類型に分けている。その分け方には二通りあって、所属動詞は大同小異である。(註二)

(1) 第一種の動詞——「状態動詞」

「動作・作用を表わす」と言うよりも寧ろ「状態を表わす」と言うべき動詞で、通常、時間を超越した観念を表わす動詞である。

例：机がある。 我が輩は猫である。 英語の会話が出来る。

この種の動詞は「—ている」をつけることがないのを特色とする。

## (2) 第二種の動詞―「継続動詞」

動作・作用を表わす動詞であるが、但しその動作・作用は、ある時間内で続いて行われる種類のものであるような動詞である。

例：本を読む。 字を書く。 雨が降る。 風が吹く。

この種の動詞は「―ている」をつけることができ、若しつけられ、その動作が進行中であること、即ち、その動作が一部行われて、まだ残りがあることを表わす。

## (3) 第三種の動詞―「瞬間動詞」

第二種の動詞と同じく動作・作用を表わす動詞であるが、その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞である。

例：人が死ぬ。 電燈がつく。 目が覚める。

この種の動詞に「―ている」をつけるとその動作・作用が終つてその結果が残存していることを表わす。

## (4) 第四種の動詞

時間の観念を含まない点で第一種の動詞と似ているが、第一種の動詞が、ある状態にあることを表わすのに対して、ある状態を帯びることを表わす動詞と言えるものである。

例：山が聳えている。 あの人は高い鼻をしている。

この種の動詞は、いつも「―ている」の形で状態を表わすのに用いるのを特色とする。

もう一方の規定では、

(一) 状態動詞―状態の不変化を表わす動詞

(二) 継続動詞―状態の一時的变化を表わす動詞

(三) 瞬間動詞―状態の永続的变化を表わす動詞

(四) 第四種動詞―状態の発端を表わす動詞

というようになる

この二通りの分け方の所属動詞は大同小異であり、その小異は次のようなものである。

(一) 例えば、「延びる」、「縮まる」、「清む」、「濁る」などごく少数の動詞が初の分類では(二)の「継続動詞」となり、後の分類だと(三)の「瞬間動詞」になる。

(二) 「瞬く」、「瞥見する」などの少数の動詞が初の分類では(三)の「瞬間動詞」に入り、後の分類だと(二)の「継続動詞」に入ることとなる。

## 三、指導する時の難点

金田一春彦氏のアスペクト研究の動機は中国人に日本語を教えた経験にもとづいたものであるので、(註三) 中国人学生に日本語の動詞のアスペクトを指導する時、金田一春彦氏のこの「国語動詞の一分類」をよりどころにして教えるが一番役に立つと思う。

しかし金田一春彦氏の「国語動詞の一分類」にも、ほかの観点による分類と同じように截然としない点がある。それは金田一春彦氏自身が断っている通り「国語に存在する総ての動詞が必ず右の分類の一つにうまくおさまると言うわけではない。否、二つ以上の項目にまたがるものが非常に多い。」ということである(註四)。

つまり、この「国語動詞の一分類」は日本語の動詞を、

(一) 動詞そのものの意味

1 「時間を超越した観念を表わす。」

2 「ある時間内続いて行われる動作・作用を表わす。」

3 「瞬間に終わってしまう動作・作用を表わす。」

(二) 「動詞+ている」の意味

1 「動作が進行中であること。」

2 「動作・作用が終つて、その結果が残存していることを表わす。」

3 「状態を表わす。」

(三) 「―ている」がつく・つかない。

という三つの規準によって四つの種類に分類するので、この三つの規

準を四つの種類の一つにかみあわせることが困難であるため、一つの動詞を二つ以上の種類にまたがらせるようになる。それは次の通りである（註五）。

(一) 第二の継続動詞と第三の瞬間動詞とにまたがるものは殊に多い。

例えば、「来る」、「行く」、「入る」、「出る」など。

(二) 第三の瞬間動詞と第四種の動詞とを兼ねているものも少くない。

例えば、「曲る」、「くっつく」など。

(三) 第一の状態動詞と第四種の動詞とを兼ねているものもある。例えば、「違う」、「当る」など。

このような「一つの動詞が二つ以上の種類にまたがる」ということは学習上の障礙になるものである。

## 四、指導方法についての私見

学生に動詞のアスペクトによる分類の方法を指導する時、前で述べた学習上の障礙を取り除けるためには、次のような指導方法を取ると役に立つだろうと思う。

(一) 動詞は大部分が動作・作用を表わすものに属し、状態を表わすものは少数の動詞に限るので、この少数の「状態を表わす」動詞に固定的に存在するものを学エに覚えさせれば便利である。それは次の通りである。

1 状態動詞に属するもの

(1) 「存在」の意を表わす「ある」(ござる)・「いる」(いらっしゃる)(おる)

例：あそこに椅子がある。

教室の中に学生がいる。

(2) 「持っている」の意を表わす「ある」(ござる)

例：あの人はお金がある。

(3) 補助動詞用法の「ある」(ござる)

例：犬は動物である。

(4) 「可能動詞」

例：英語が話せる。

(5) 動詞第一変化形(未然形)＋(可能を表わす)「れる(られる)」

例：字が書かれる。

英語で電話が掛けられる。

(6) 「可能」の意を表わす、少数の動詞「出来る」・「分かる」・「見える」・「聞える」など。

例：英語の会話が出来る。

(7) 「必要」の意を表わす動詞「要する」・「かかる」・「いる(五段)」など

例：三時間を要する。

(8) 形容詞の語幹に「すぎる」がついて出来た動詞

例：これは大きすぎる。

(9) その他「言う」・「値する」

例：秀吉と言う人「言う」

注目に値する「値する」

2 第四種の動詞に属するもの

この種類に属する動詞の数は甚だ少ない。金田一春彦氏の調査によると、次のようなものがある(註六)。

「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」、「ずばぬける」、「ありふれる」、「才気走る」、「才はじける」、「にやける」、「ばかげる」、「富む」、「似る」、「(高い鼻を)する」など。

(二) 「状態を表わす」動詞は(1)状態動詞と(2)第四種の動詞とのほかに「状態動詞と第四種の動詞とにまたがる動詞」という項目を設ける必要があると思う。  
前に述べたように、状態動詞は「ている」をつけることがないの

を特色とするのに対して、第四種の動詞はいつも「ている」の形で用いるのを特色とするので、両者は形において反対性を持っている。しかし、例えば「当る」のような動詞は終止形でも「動詞十ている」の形でも、同じく状態を表わすことができ、「あの人は私の叔父に当る」と、「あの人は私の叔父に当っている」とは同じ意味をもつので、このような動詞を、反対性を持つ二つの種類にまたがらせたまま、特別に取り出して取り扱わないと、矛盾が生じるのである。

状態動詞と第四種の動詞とにまたがるものは藤井正氏の調査によると、次のようなものがある（註七）。

「（叔父に）当る」、「異る」、「違う」、「適する」、「付随する」、「共通する」、「兼ねる」、「属する」、「関係する」、「含む」、「相当する」など。

(三) 継続動詞と瞬間動詞を区別する時、一つの動詞が二つの種類にまたがるという、截然としないことが殊に多いので、その区別法を指導する時、特に次のようなことに注意する必要があると思う。

1 一つの動詞が二つ以上の意味を持つことがある。

例えば、「来る」の一語は金田一春彦氏の説明によると、次の通りである。

「来る」は向うから此方へ移動する途中の動作全体を意味することがあり、この時は継続動詞である。然し、また此方へ到着した瞬間を意味することもあり、この時は瞬間動詞である（註八）。

2 動詞を述語とする文の表わしている場面によって、その動詞の属性が変わることがある。

例えば、「死ぬ」の一語は、同じく金田一春彦氏の説明を引用

すると、次の通りである。

「死ぬ」は人が息を引取る瞬間を言うので、息を引取る瞬間に「死ぬ」が初まり、途端に「死ぬ」は終る（註九）。

しかし、この「死ぬ」は金田一春彦氏の次のような二つの例文において、一つの動詞が二つの種類にまたがるようになるのである（註十）。

例1 「うちの親爺は中風を七年患って死んだ。」

例2 「この頃は營養失調のために都会の人がどんどん死んでいる。」

金田一春彦氏の見方によると、例1の「死ぬ」は瞬間動詞であり、例2の「死ぬ」は継続動詞である。これは「死ぬ」を述語とする二つの例文の表わしている場面の違いから生じたずれである。

この二つの事実にもとづいて考えた、継続動詞と瞬間動詞についての分類方法は次のようなものである。

1 ある意味を表わす動詞が一つの文の表わしている場面において、その動作・作用が連続的に行われることが見られる時、その動詞は「継続動詞」である。

例えば、前述の「来る」は「向うから此方へ移動する途中の動作全体を意味することがある」ので、こちらへ近づきつつある人の「来る」という動作・作用が連続的に行われることが見られるから、その人を指して「あの人は今こちらへ来ている」と言えるのである。この時の「来ている」は「動作進行中であること」を表わすので、この「来る」は継続動詞になる。

また、前述の「死ぬ」の一語は瞬間動詞の代表的なものである。

るが、「この頃は營養失調のために都会の人がどんどん死んでいる。」という場合、この「死ぬ」は「都会の人」という多数の人（複数の主体）が個別的にどんどんおこなった動作・作用で、連続的に行われることが見られるので、この時の「死ぬ」は継続動作に属する。

2 ある意味を表わす動詞が一つの文の表わしている場面において、その動作・作用が瞬間に終わってしまい、連続的に行われることが見られないのは「瞬間動詞」である。

例えば「来る」はまた「此方へ到着した瞬間を意味することがある」ので、ここに到着してまだここにいる人を指して、「あの人はここに来ている。」という時、その「来る」という動作・作用は、すべに到着した瞬間に終わってしまい、その動作・作用が連続的に行われることが見られないから、この時の「来る」は瞬間動詞である。

四 瞬間動詞と第四種の動詞とにまたがるものがあるのは、その原因も、(三)項に述べたように「一つの動詞が二つ以上の意味を持つことがある」と「動詞を述語とする文の表わしている場面によって、その動詞の属性が変わることがある」との二つにある。

瞬間動詞と第四種の動詞とにまたがるものは「動詞十ている」の形によってその属性が区別される。

「動詞十ている」の形を述語とする文の表わしている場面において、その「動詞十ている」の形は「ある瞬間に終わってしまった動作・作用の結果が残存していること」を表わす時、その動詞は瞬間動詞に属するが、「動詞十ている」の形は「ある状態を帯びること」や「状態の発端」を表わす時、その動詞は第四種の動詞に属する。

例えば、「曲る」の一語は、金田一春彦氏の説明によると、次の通りである。

釘や火箸のようなものに対して、「この釘（火箸）は曲っている」と言う時は、その釘や火箸は曾て真直ぐだったのが、ある時に曲ったのであるから、この「曲る」は瞬間動詞であるが、「この道は曲っている」と言う時は、初めから曲っているのであるから第四種の動詞の例である（註十一）。

つまり、「この釘は曲っている」と言う時の「曲っている」はある瞬間に終わってしまった「曲る」という動作・作用の結果が残存していることを表わすので、この時の「曲る」は瞬間動詞であるが、「この道は曲っている」と言う時の「曲っている」はこの道の出来た最初の時からずっと「曲っている」という状態を帯びていることを表わすので、この時の「曲る」は第四種の動詞になるのである。

## 五、おわりに

以上、日本語アスペクト分類に関する研究において代表性を持って、影響力の一番強い（註十二）と認められる、金田一春彦氏の「国語動詞の一分類」について、その指導方法を述べてきたが、あまりにも複雑なものであるので、問題をこれで全部解決できるものではない。筆者としては、このように指導すれば、困難さが多少軽減できると思って文法指導の立場に立って、私見を出してみたのであるがご叱正をお待ちする次第である。

### 〔註〕

註一：鈴木康之「日本語文法の基礎」一九頁参照。

註二：金田一春彦「国語動詞の一分類」—金田一春彦編「日本語動詞のアスペクト」七〇九頁・二四〇二五頁。

註三：金田一春彦氏は「国語動詞の一分類」という論文の「はしがき」で次のように述べている。

中華語の「我明白。」を日本語に訳すと、「私は分ります。」であり、中華語の「我知道。」を日本語に訳すと、「私は知っています」である。「私は知っています」の代りに「私は分っています」と言ったら威張っているように感じる。これは我々日本人にとっては極く明らかなことであるが、然らば「知る」も「分る」も同じような意味の語であるのに、何故このようなちがいが出て来るのか、と外国人に聞かれたらその答えは必ずしも容易ではない。小稿は、中華人の留学生にこの問題をどう教えようかと苦しんでいるうちに考えついたところをまとめて見たものである。

註四：金田一春彦「国語動詞の一分類」—金田一春彦編「日本語動詞のアスペクト」一一頁。

註五：前掲書 一一頁。

註六：前掲書 一〇頁。

註七：藤井正「(動詞十ている)の意味」金田一春彦編 前掲書 一〇八頁。

註八：金田一春彦「国語動詞の一分類」 前掲書 一一頁。

註九：前掲書 八頁。

註十：前掲書 八頁・十二頁。

註十一：前掲書 一一頁。

註十二：高橋太郎氏は「日本語動詞のアスペクト研究小史」でこれらの文献のアスペクトに関する主要な内容を整理し、その論文の最後の「まとめ」で、金田一春彦氏の動詞の分類がアスペクト研究の歴史過程に占めている位置を次のように強調している。

一九五〇～五五年、金田一春彦は、今世紀初頭以来の松下—

小林—佐久間鼎という先人の業績のうえにたって、日本語動詞のアスペクトをシステムとしてうちだし、また、アスペクトの観点から動詞の分類を提出した。金田一がアスペクトをテンスと対立させ、アスペクト形式の全体象をえがきだしたことと、すべての動詞をアスペクトの観点から分類したこの二つの意義はおおきく、このことによって、金田一の一九五〇(「国語動詞の一分類—筆者註」、一九五五(「日本語の動詞のテンスとアスペクト—筆者註」)は、今世紀後半のアスペクト研究の出发点となった。金田一のシステムの内容は、藤井正一九六六(「動詞十ている」の意味—筆者註)、その他によってすこしずつ修正されているが、現在でも、アスペクトといえば、金田一論文がまずひきだされるのがふつうである。

金田一春彦氏のアスペクト研究内容の代表性は、その影響力が強いという事実から見ても分かるものである。(金田一春彦編 前掲書三五三頁参照)

## 参考文献

- |       |               |        |
|-------|---------------|--------|
| 金田一春彦 | 日本語動詞のアスペクト   | むぎ書房   |
| 文化庁   | 日本語と日本語教育—文法編 | 大蔵省印刷局 |
| 文化庁   | 日本語教授法の諸問題    | 大蔵省印刷局 |
| 佐久間鼎  | 現代日本語の表現と語法   | 厚生閣    |
| 鈴木康之  | 日本語文法の基礎      | 三省堂    |
| 大久保忠利 | 日本文法の心理と論理    | 国土社    |